

ゲンビ「広島ブランド」デザイン公募 2018 展

(審査結果・展覧会開催)

2019年2月16日(土)～3月3日(日)

広島を効果的に魅せる。アイデア勝負の公募プログラム。
入選作 8 点が決定しました！

「ゲンビ『広島ブランド』デザイン公募 2018」は広島にちなんだモノ・コトにまつわるデザイン案を募集し、すぐれた作品を展覧会として紹介するオープン・プログラムです。

広島の名産品や風土、文化をテーマとし、デザインの観点から発展させた新たな「広島ブランド」のアイデアを募集、それらのアイデアを「いかに見せるか」という点も重要ポイントとして審査した結果、8 点の入選作品が決定しました。入選作品を紹介する展覧会を 2 月 16 日(土)より開催します。合わせてご周知ください。

【応募総数】59 件 【入選】8 件(特別審査員賞 3 件含む)

※特別審査員：貞廣一鑑(株式会社商業藝術 代表取締役兼社長執行役員)、鈴木康広(アーティスト)、須藤玲子(NUNO デザインディレクター)

【審査の流れ】美術館学芸員による一次審査を行った後、特別審査員を交えて二次審査を行い、特別審査員賞ならびに入選作品を決定。

※最新情報から企画詳細まで！特設サイトでご紹介しています。

<https://www.hiroshima-moca.jp/h-brand/>

【展覧会 会期】2019年2月16日(土)～3月3日(日)

【会場】広島市現代美術館 地下1階ミュージアムスタジオ

【開館時間】10:00-17:00

【休館日】月曜日

【観覧料】無料

【協賛】オリエンタルホテル広島

【協力】広島商工会議所青年部

<授賞式&スペシャルトーク>

2月16日(土) 14:00～授賞式、15:00～貞廣一鑑スペシャルトーク

入選者への賞状及び金一封贈呈。授賞式終了後、特別審査員・貞廣一鑑氏(株式会社商業藝術 代表取締役兼社長執行役員)を迎えてトークを開催します！

※いずれも参加無料

<観客賞>

来場者による投票で入選作品の中から観客賞(1名)を決定します。

投票期間：2月16日(土)～24日(日)

※2月26日(火)結果発表(特設サイト)

【特別審査員賞(3作品)】

貞廣一鑑 賞

Jiangjie 《広島の雨》【広島県在住】

せっかく広島を訪れたのに、雨が降っていたら。旅行先での天候に悩まされた経験のある人は多いだろう。季節ごとのもみじのイメージがプリントされたビニール傘には、雨の日でも広島のみち歩きを楽しんでもらいたいという思いが込められている。



「ゲンビ「広島ブランド」デザイン公募 2017 展」(2018年2-3月開催)より



↑展示風景



↑観客賞・野崎 俊佑 (NOZa-maru・有建築研究所)《ボタニカルふりカキ》



【特別審査員賞】

鈴木康広 賞

藤本聖二《一（はじめ）》 [広島県在住]

広島市は全国第3位の鋳物の生産量を誇り、また、化粧筆で知られる熊野町は書筆の一大産地でもある。そこから砂型鋳造による文鎮のコンセプトが生まれた。書の基本である「一」の文字を立体化した形には、ものごとの始まりや、初心を忘れないようにという意味が重ねられている。

須藤玲子 賞

熊谷和 + 田代拓也 + 畠山拓也《折り鶴のチャペル》 [福岡県在住]

折り鶴の紙を再生して作られる建築材料を用いたモニュメント。毎年建て直されることによって、恒久の平和が祈られる。折り鶴の折図をもとにした幾何学図形のブロックを積み上げる構造であり、軽さ、光透過性、風合いのある質感といった紙の特性を備えている。

【入選（5作品）】 (五十音順)

岩竹俊範《Setouchi Park》 [広島県在住]

牡蠣筏のモジュールに合わせた筏を組み、船で曳航可能な大きな浮舟あるいは公園のような場所を瀬戸内海の海上に出現させる。海のアクティビティを体験する場として、さらには水産資源への理解を深める場として機能することを目的としている。

折戸朗子《広島弁いただきます！》 [東京都在住]

「方言」という目に見えない特産物を、「食べる」ことによって身につけよう、というユーモアのある提案。のびやかで、かわいらしくも聴こえる広島弁の特徴を捉えたストロー、クッキーは、言葉が口を出て空中に漂っていく様子をイメージしている。

坂本龍之介《C-plate ～広島人のための好み皿～》 [広島県在住]

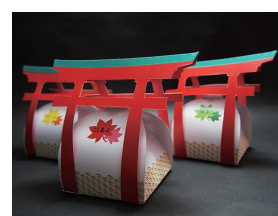
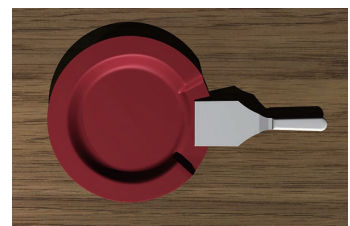
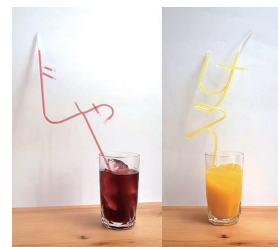
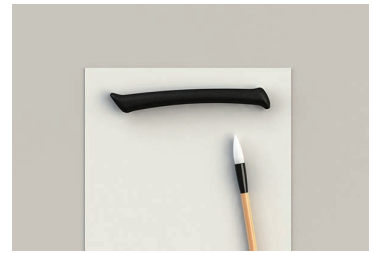
お好み焼き用の平皿の縁を部分的に低くして、コテをそこに置くと、おなじみの広島東洋カープの「C」が浮かび上がる。「広島ブランド」として、店舗はもちろん、家庭でも、球場でも、あるいはお土産としても広く使用できるアイテムである。

西尾通哲 (240design) 《ひろしまは島でできている / Hiroshima Geographical Geometry》 [広島県在住]

6本の川と5つの島で構成される広島市の地理的特徴が、抽象的な幾何学図形によって表現される。図形はフォントや模様、図案に再構成され、さまざまなプロダクトやアクティビティとして展開される。人々の意識の中に新たな都市のイメージを作り出す試みである。

山田夏穂《ギフ鳥居》 [千葉県在住]

宮島の大鳥居をモチーフにしたパッケージの提案。お土産としてもみじ饅頭をひとつだけ渡したい時のための包装箱として考案された。立体的に膨らんだ大鳥居の上部のミシン目を切って鳥居を開き、箱の綴じ目を開けるといふ、視覚的にも楽しめる仕組みとなっている。



審査を終えて～特別審査員による審査講評

貞廣一鑑 (株式会社商業藝術 代表取締役兼社長執行役員)

映画『雨に唄えば』(原題: Singin' in the Rain) [1952年公開]
雨を忌み嫌うか、それとも、雨を愛し、唄い踊るのか…

広島に降る雨のイメージは、「黒い雨」など悲しい側面が多いかもしれませんが。広島市民としては過去を教訓にする事も大切ですが、《広島の雨》からは未来の光が見えた気がしました。素直に、この紅葉舞い踊る傘が、雨の広島に咲いている景色を想像しとても素敵だと思います。海外の方が日本的なプレゼンテーションをされたことにも好感を持ちました。

《折り鶴のチャペル》はコンセプトの堅実さと実現性の高いデザインに、人を集め広島を活性化する可能性を感じました。是非実現させたい素敵な提案です。

入選作ではありませんが《Oleander Streetlight》はコンセプトに驚きました。広島市の花、夾竹桃は、可憐な姿とは裏腹に猛毒を併せ持つこと、それこそが終戦の希望であった事を初めて知りました。相反する要素が作品の中で共存しています。広島象徴的なモチーフは数多くありますが、それらに左右されず、確固とした着眼点と発想で、芸術性と商業性を両立し昇華している作品を選びました。

鈴木康広 (アーティスト)

広島で生まれ育った人から住んだことがない人まで、あるいは移住したばかりの人など、応募者の多様な視点に触れることができ、審査を通して僕自身の中にあつた「広島」に広がりをもたらしてくれました。コンペではプレゼンテーションの要とも言える資料の仕上がりが評価の軸として欠かせず、着想や考え方に引かれつつ惜しい提案もありました。広島名物をモチーフにした発想は、新たな商品や製品化を連想させて楽しいのですが、僕自身は、一瞬、「？」となってしまうような未知の「間」を持つ提案を期待しました。既に認められた広島らしさをシンボライズするのではなく、一見すると関係のないものでも、広島に在ることによって生まれる「何か」に期待を寄せてしまいます。潜在的な見えない関係性を見立てる方法やきっかけをつくるのがデザインの可能性として重要なポイントだと考えているからです。このような多様な視点が交差するコンペが続くことで、「広島」のイメージや、今、広島にあるものへの向き合い方が攪拌され、思いもよらないものが生まれるきっかけになるのではないかと思います。

須藤玲子 (NUNO デザインディレクター)

熊谷和 + 田代拓也 + 畠山拓也《折り鶴のチャペル》

世界中から集まる折り鶴を再加工して積み上げ、モニュメントとする提案である。8月6日の記念日に向けて、一年ごとに新たにモニュメントを立てるということで、立て続く限り、平和への祈りが続いている。

この提案の評価のポイントは、廃棄される毎年10トン以上の世界中から集まってくる折り鶴を再利用している。

それをモニュメントとして表現している。

更には、核戦争を経験した広島市民の平和への希求の強さを表しているところと言える。

「広島ブランド」という趣旨からは、常識的には多少逸脱しているかもしれないが、紛争が絶えない現在の世界状況を踏まえると、愚直に平和を求める人の心をあえて評価したい。



Photo:
Herbie Yamaguchi

広島県出身。「Make a Cinema Day あなたを上映する」をテーマに、多様な人材が個性を發揮し、相互扶助で成長できる会社組織の構築を追求する経営者。社名はコマースとアートの相反する2つの共存を表している。既存文化の編集・再生を「Re_culture 文化再生」、人が集まる社交場の創造を「クロッシングビジネス」と位置づけ、公園付帯型店舗の Park South Sandwich (広島市) や、劇場跡地に EIGHT SUPPERCLUB (広島市) など、現代の新しい社交場を生み出している。レストラン、婚礼、美容など 85 店舗を展開。



Photo courtesy:
The Japan Foundation

静岡県出身。既にあるものや見慣れた現象に新鮮な切り口を与える作品によって、もの見方や世界のとらえ方を問いかける活動を続けている。代表作に《まばたきの葉》、《ファスナーの船》、《空気の人》など。2014年、水戸芸術館にて鈴木康広展「近所の地球」、2017年、箱根彫刻の森美術館にて「鈴木康広 始まりの庭」を開催。「第1回ロンドン・デザイン・ビエンナーレ 2016」に日本代表として出展。2014年毎日デザイン賞受賞。平成29年度文化庁文化交流使。武蔵野美術大学准教授、東京大学先端科学技術研究センター客員研究員。



Photo:
Kosuke Tamura

茨城県出身。武蔵野美術大学工芸デザイン学科テキスタイル研究室助手を経て、株式会社「布」の設立に参加。現在、取締役デザインディレクター。日本の伝統的な染織技術から現代の先端技術までを駆使し、新しいテキスタイルづくりを行う。世界各地の美術館、大学で講演、展覧会を数多く行う。2008年より無印良品のファブリック企画開発に携わり、2016年よりデザインアドバイザーボード。毎日デザイン賞、ロスコ賞、JID部門賞等受賞。英国UCA芸術大学より名誉修士号授与。東京造形大学教授。